Global Citizenship Program の 取り組み状況と今後に向けた課題

中　西　知　子

Ongoing Situation and Obstacles to Overcome in the Global Citizenship Program

NAKANISHI Tomoko

Abstract : At the Department of Multicultural Communication, Faculty of Global Studies, a new curriculum called Global Citizenship Program has been established to develop students' global competence. This report reviews the program from inception to the current situation for the first one and a half year which has been affected by the COVID-19 pandemic. Challenges to be tackled are inspiration for domestic activities, reflection on learning process, and enhancement of collaboration with the regular curriculum.

Key Words : Experiential Learning, Active Learning, Global Leaders, Global Citizen

要旨：国際学部多文化コミュニケーション学科では，グローバル・シティズン育成のカリキュラムとして，Global Citizenship Program が創設された。新型コロナウイルス感染症の影響下で，初期の構想から実際の活動へとどのように変遷したか，取り組み開始から現在までの 1 年半の概要を述べる。今後の課題として，国内活動への興味関心の喚起，活動の振り返り，学科専門科目との連携強化を挙げる。

キーワード：体験学習，アクティブ・ラーニング，グローバル人材育成，グローバル・シティズン

は　じ　め　に

甲南女子大学文学部多文化コミュニケーション学科は，2020 年 4 月に新設された国際学部へ再編され，国際学部多文化コミュニケーション学科となった。同学科は，これまでと同様，1）実践的な語学力，2）世界とつながるための教養や知識，3）世界と協働するための行動力や実践力の 3 つの力を学びの中心に据えつつ，グローバル化が進む社会において，今まで以上にグローバルな現場で必要となる力を備えたグローバル・シティズンの育成を目標としている。このグローバル・シティズン育成のためのカリキュラムの中核として創設されたのが Global Citizenship Program（略称 GCP。以下 GCP と表記）である。

本稿は，国際学部多文化コミュニケーション学科発足と同時に着任した GCP コーディネーターの立場から，新型コロナウイルス感染症（略称コロナ。以下コロナと表記）の蔓延とともに開始した本プログラムが，当初の構想からどのような過程を経て活動実施に至ったかを，学生が希望する活動の変遷とともに報告し，今後のより良い運用に向けて一定の材料を提供するものである。

1. GCP の概要

1.1　GCP とは

GCP とは，端的に言えば，国内外の体験学習を通してグローバル社会で必要な知識やスキルを身につけるプログラムを指す。より具体的には，グローバル・シティズンになるために，各学生が身につけたいと考えている能力や将来の進路に応じた国内外でのインターンシップやボランティア等の体験学習に主体的に参加することを通して，グローバル社会で活躍する力を身につけるプログラムのことである。

インターンシップやボランティアといった活動そのものを指す狭義な意味で GCP という用語を用いることがあるが，本稿では学科が目指す上述の能力を身につけるための 4 年間のカリキュラム全体を指す包括的なプログラムを「GCP」（図 1 実線部分），インターンシップやボランティアといった国内外における体験学習を「GCP 活動」（図 1 点線部分）と区別して呼ぶ。2 章以降で取り上げる GCP の取り組み状況は，包括的な GCP 全体についてのものではなく，GCP コーディネーターの業務である GCP 活動部分に焦点をあてたものである。

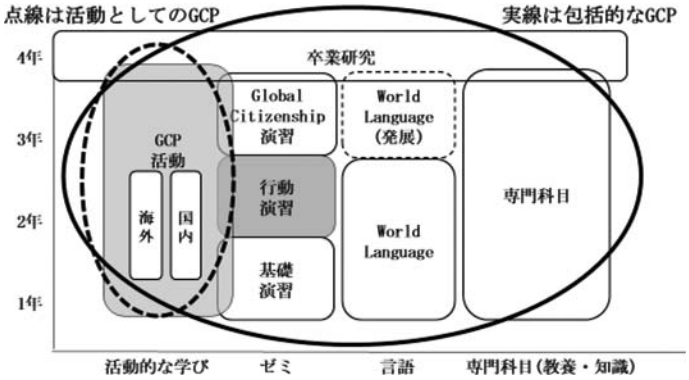

図 1　学科の学びの概念図

学科では，グローバル・シティズンになるために身につけるべき能力を，Multicultural Communication Competencies 10（略称 MCC 10。以下 MCC 10 と表記）として 10 のカテゴリーに分類している。具体的には，1）言語理解（外国語），2）文化理解，3）社会問題理解，4）問題解決理解，5）言語運用力（日本語／外国語），6）メディア・リテラシー，7）異文化間コミュニケーション力，8）共有型リーダーシップ，9）課題解決力，10）多文化共生構想力である。学科のすべての専門科目において，MCC 10 の中で主にどの力を伸ばすかをシラバスに明記しており，GCP 活動を実施する科目においても当てはまる。

GCP の成長モデルは，Plan（計画），Do（実行），Check（評価），Act（改善）の PDCA サイクルを螺旋階段のように繰り返すことである。活動前は目標設定のワークショップ等を通して計画を立て，活動後は策定した計画をもとに振り返りを行う。省察しながら自身の体験を言語化するという一連のプロセスを一過性のものとして終わらせるのではなく，体験から得られた成果や課題をどのように次の PDCA に活かしていくか，さらに PDCA サイクルを繰り返しながら得られた学びをいかに卒業後の進路やキャリア形成に繋げていくかを重視している。

なお，図 1 に記載されている 1 年次～4 年次のゼミのうち，特に 2 年次のゼミである「行動演習」は，その名のとおり主体的に学び行動することに力点が置かれており，PDCA を意識して活動を行う GCP のコア科目と位置付けられている。

1.2　GCP 活動

GCP 活動は，大別すると海外と国内がある。海外の活動は，1）大学が主催するプログラム，2）主に公的機関が実施する学外プログラムの 2 種類である。1）は，交換留学や認定留学[1] 等の長期留学に現地でのボランティア

1　交換留学は，協定を締結している協定校に留学し，正規の大学の授業を履修する留学制度を指す。認定留学は，留学先で取得した科目を本学の単位として認定する留学制度を指す。

やインターンシップを組み合わせたプログラムである GCP 留学，全学部の学生が参加可能な 2〜3 週間程度の海外短期研修[2]，学科の学生のみが参加可能な海外短期研修等が用意されている。2）は，内閣府が実施する青年国際交流事業である世界青年の船，外務省が進める対日理解促進交流プログラム JENESYS，一般社団法人 CIEE 国際教育交換協議会（略称 CIEE。以下 CIEE と表記）が実施する海外ボランティアプログラム等，大学が認定する学外プログラムに参加することで単位を修得できるものである。

国内の活動は，1）学外での活動を中心とするもの，2）講義に一部学外での活動を組み合わせたものの 2 種類がある。1）は，例えば ESD 推進ネットひょうご神戸が主催する ESD スタディツアー[3]，大学コンソーシアムひょうご神戸と協働で実施する留学生との国際交流プログラム，学科で取得可能な資格である文化交流創成コーディネーター（略称 ICCO。以下 ICCO と表記）の短期集中セミナー，グローバル企業におけるインターンシップ，多文化共生や国際交流分野における NGO や NPO でのインターンシップなどが挙げられる。2）はソーシャルビジネスに関する科目で，理論にもとづいて社会課題解決の事業を立案するなど，問題解決型学習である PBL を取り入れた演習である。

学科では，上述の活動に所定時間従事し，表 1 に記載する科目を 2 単位以上修得することを卒業要件としている。なお，表 1 には 2020 年 10 月時点の GCP 活動を掲載しているが，コロナの影響で中止や延期を余儀なくされたものもある。変更の詳細については 3.3 で述べる。

表 1　GCP 活動一覧（2020 年 10 月時点）

			活動	詳細	科目	単位
海外	学内	長期	交換留学 認定留学	留学パンフレットに記載	単位対象外	
			GCP 留学	・韓国 ・台湾 ・カナダ ・アメリカ ・オーストラリア	「GCP フィールド実践演習 AⅠ・AⅡ・B」	1-2 単位
		短期	海外短期研修 （学科独自）	・フィリピン ・台湾		1 単位
			海外短期研修 （大学全体）	・韓国文化研修 ・中国文化研修 ・カナダ文化研修 ・イギリス文化研修 ・アイルランド文化研修 ・インドネシア文化研修 ・フィリピン語学研修 ・ネパールスタディツアー	「GCP 海外演習 AⅠ・AⅡ・B」	1-2 単位
	学外		公的機関のプログラム	世界青年の船，JENESYS，JICA ボランティア等	「GCP フィールド実践演習 AⅠ・AⅡ・B」	1-2 単位
			CIEE 海外ボランティアプログラム	CIEE パンフレットに記載		
国内	講義		「ソーシャル・ビジネス演習」			2 単位
	学外		ESD スタディツアー	ESD 推進ネットひょうご神戸 HP に記載	「GCP フィールド実践演習 AⅠ・AⅡ・B」	A 1・A 2 各 1 単位 B 2 単位
			国際交流プログラム	留学生との国際交流プログラム企画，運営，実施		
			ICCO	ICCO 短期集中セミナー		
			企業インターンシップ	グローバル企業におけるインターンシップ	「グローバルキャリア演習 Ⅰ・Ⅱ」	各 1 単位
			NGO/NPO インターンシップ	多文化共生や国際交流分野等の NGO/NPO におけるインターンシップ	「NGO/NPO インターンシップ演習 Ⅰ・Ⅱ」	各 2 単位

2　通常，本学では文化研修と呼ぶが，本稿では海外短期研修と記載する。

3　Education for Sustainable Development（略称 ESD：持続可能な開発のための教育）を体験するために作られたプログラムである。NGO/NPO，市民活動団体，企業，行政，学校等が，持続可能な社会づくりのために実施する様々な活動，セミナー，シンポジウム，ボランティア，ワークキャンプ等の現場に参加する。

2. GCP 活動実施に至るまで

2020 年 4 月 7 日，兵庫県を含む 7 都道府県に初の緊急事態宣言が発出され，留学を含む GCP 活動の先行きが不透明な中，発足 1 年目の GCP を開始した。

2021 年 10 月現在，2020 年 4 月入学生（以下 1 期生と表記）88 名の全員が GCP 活動科目を履修中もしくは 2 単位以上を修得済みである。本章では，活動開始までに行った複数回のアンケートやヒアリングの結果を時系列で記載し，コロナ禍で活動場所や活動形態に制約がかかる中，学生が希望する活動がどのように変化していったかについて述べる。

2.1　GCP 活動アンケート（7 月）

入学後，最初に GCP について学ぶ科目は，前期の必修科目である「グローバル・シティズンシップ入門」（略称「GC 入門」。以下「GC 入門」と表記）である。本科目は，学科が目指す学びや MCC 10，グローバル・シティズンシップとは何かについて学んだ上で，GCP の個々の活動や，活動と MCC 10 の関連について学ぶ GCP のオリエンテーション科目と位置付けられる。GCP 活動そのものへの関心を広げ，活動参加への意欲や関心を高める科目である。

2020 年 7 月に実施した同科目の 12 回目に，興味のある分野，不安に思っていること，質問についてアンケートを実施した。最終回である 13 回目には，授業全体のまとめとして，参加したい GCP 活動とその理由を提出させた。アンケートの主たる目的は，1 年前期終了時点の学生の傾向を把握することであったが，同時に，思い描いていた留学や活動が本当にできるのかと不安を抱えている学生の声を受け止め，後期に実施する面談に繋げることでもあった。

アンケートは，1 期生 88 名のうち 82 名が回答した。現時点で海外と国内のどちらの活動に興味を持っているかについては，80 名中 53 名が海外，1 名が国内，28 名が迷っていると答えた。複数回答も可とした参加したい海外活動は，大学が実施する海外短期研修への参加希望が 47 名，次いで韓国への GCP 留学希望が 33 名であった。GCP 留学とは，交換留学や認定留学の期間中に留学先でインターンシップやボランティア等を行うもので，長期留学と活動を組み合わせた留学制度を指す。交換留学や認定留学の期間が 1 年程度という長期の場合にのみ実施可能な留学形態で，成績や語学要件に基づく選考によって派遣者が決定する。難易度の高い留学制度であることを理解した上での回答かどうかに関しては疑問の余地があるものの，GCP 留学の希望者は韓国に限らず全般的に多く，インターンシップやボランティアといった活動を伴う留学に対する関心の高さがうかがえた。

国内活動では，企業インターンシップへの参加希望が 25 名いた一方で，ESD スタディツアーへの参加希望は 5 名にとどまった。企業インターンシップに比較的多くの学生が興味を示した理由としては，自由記述欄に書かれた「就職に有利になりますか」という記載に示されるとおり，1 年次から卒業後の進路や就職に高い関心を持っている学生がいることや，「GC 入門」で示されたインターンシップの例がホテルやテーマパークといった学生の興味関心の高い分野であったことなどが考えられる。ESD スタディツアーの希望者が少なかった理由については，名称が直感的に分かりにくいことや，学科として初めての取り組みであることから具体的なイメージを持ちにくかったことなどが考えらえる。複数回答も可とした興味のある分野については，78 名が語学，55 名が国際協力・国際交流と返答し，語学や国際交流への関心の高さがうかがえた。

自由記述欄には，14 名の学生が「コロナの影響で様々なことが不透明なので，留学の目途が立ってないことが一番の不安」「未来の見通しが全く立てられない状況なのでそこが不安」といったコロナに起因する不安を書き記していた。また，留学にかかる経済面での不安や，語学や生活面での不安も少なくなかった。

アンケートでは活動に関する質問も受け付け，この時点では「いつ頃までにはっきりとした計画を立てておくべきなのか」「語学はどの程度必要か」「短期研修を何個も取ることはできるのか」といった制度や条件に関する基本的な質問や漠然とした質問が多かった。

学生が希望する活動は圧倒的に海外が多かったものの，2020 年 7 月時点で 2020 年度の長期留学派遣の中止は決定しており，国内の活動枠を増加する必要性は明白であったため，国内活動の開拓に力を入れた。特に学生の

関心が高い語学や国際交流分野で活動を実施できるよう，すでに候補として検討されつつあった大学コンソーシアムひょうご神戸との国際交流プログラムを GCP のパイロット事業として進めることとなった。あわせて，各学科教員の専門分野において国内活動を実施すると仮定した場合，どのような活動の可能性があり得るかを各教員が検討した。同時に，コロナが早期に収束した場合と長期に渡った場合のシミュレーションを行い，特に国内の各活動でどの程度の人数枠が必要と推定されるかを検証した。

2.2　GCP 面談（10-11 月）

2020 年 10 月～11 月の期間，GCP コーディネーターと学生の一対一の面談を実施した（1 名のみ 2021 年 1 月下旬実施）。目的は，1）7 月のアンケートで挙げられた質問に答えつつ，GCP の全体像を改めて伝えること，2）コロナ禍の大学生活や活動の不安を受け止めること，3）希望する活動を具体的に考える契機とすることとし，88 名全員と 20～30 分程度話をする機会を設けた。

面談の最後には，今後活動を決定する過程で，学生自身で調べたり考えたりする必要があることを検討事項として共有し，1 月の活動計画書に調べた結果を反映するよう伝えた。12 月以降は希望者と 2 回目の面談を実施した。

面談終了後の気付きは，以下である。

- 興味のある活動については一定程度理解しているものの，GCP の全体像は理解できていない。また，活動を行うことでどの科目を何単位履修することになるかはまったく理解できていない。
- GCP 留学，交換留学，認定留学の違いを理解していない。特に GCP 留学については，定義が分かりにくい。GCP に関連しているすべての留学を GCP 留学と捉えている学生がおり，名称が混乱を招いている。
- 大半の学生が「一番実施したい活動は留学」と答えるため，面談が留学相談となることが多い。交換留学や認定留学自体は GCP 活動の対象範囲外であるが，GCP センター[4] がワンストップサービスとして機能するよう，留学に関する正確な情報を広く把握しておく必要がある。
- 英語圏・韓国への留学は，「とりあえず」「なんとなく」希望している学生が一定数いる。
- 就職活動のスケジュールを把握していない。就職を希望する場合は，就職活動の開始時期から逆算して留学時期を決める必要があることが伝わるよう，留学期間のパターンを複数例示する必要がある。
- 国内活動の大半は新規に実施するため，学生に例示できる具体例に乏しく，活動のイメージを伝えるのが難しい。一方で，7 月のアンケート時よりも相当に多くの学生が国内活動への参加を視野に入れている。
- 海外志向の強い学生に対して，国内でも語学を使う活動やグローバルな要素が含まれる活動があること，留学時に必要となる能力を伸ばせること等を提示すると，学生の興味関心を喚起できる。
- 活動に参加するためには，まず該当する GCP の科目を履修登録する必要があることを理解できていない学生が多い。
- 将来希望する進路やキャリアが未定で，どのように活動を選択してよいか分からない学生が多い。将来像があるという学生についても，幅広い選択肢を知った上での将来像とは言い難いケースも多く，早い段階からキャリアに向けた視野を広げる必要がある。
- 入学時に抱いていた留学への夢が叶っておらず，また見通しも立たないことから，モチベーションが下がっている学生がいる。

より具体的で丁寧な説明が必要と感じられた点については，2.3 で述べる「基礎演習」の時間を用いて詳しく学生に説明を行った。同時に，複数の学生から挙げられた質問については，「GC 入門」で実施したアンケートの自由記述欄に記載されていた質問とあわせて Q&A 集を準備するなど，面談での気付きをプログラム運営に反映させる対応を取った。面談での質問は，「1 年間留学をした直後に企業インターンに参加することは可能か」「GCP 留学の語学基準に TOEIC が挙げられているが，TOEIC IP テストの点数でもよいのか」など，7 月のアンケート時と比較して具体的なものが多数見られた。

4　多文化コミュニケーション学科のコモンルーム内に設けられた GCP コーディネーターが常駐する場所を GCP センターと呼ぶ。GCP に関する情報提供や相談を行う。

学科教員との連携の観点では，面談実施前にゼミ教員から学生に関する情報を聞き取り，面談後は各学生との面談内容を共有した上で，特記事項のある学生についてはゼミ教員に対して個別に懸念点を伝える体制とした。

学生一人ひとりと面談をすることで，この大学や学科を選択した理由，在学中に身につけたい能力，描いている夢や将来像など，等身大の学生像を知ることができ，学生の視点に立った GCP を作り上げる上で役立った。また，趣味や部活，アルバイト等の情報が，その後連絡を取ったり学内で見かけた際に話しかけたりするきっかけとなり，学生が相談しやすい GCP センターを作る上で効果があった。

写真 1　GCP センターでの面談

2.3　GCP 活動計画策定（12-1 月）

2020 年 12 月の「基礎演習」で，面談で挙げられた質問や不安を補完しつつ改めて GCP 全体像や個別の活動について説明し，コロナの影響で CIEE が海外ボランティア分野から撤退したことや，ICCO の短期集中セミナーが延期となったこと，大学のプログラムとしてオンライン留学プログラムが新設されたこと等を共有した。

その後，12 月時点でもっとも興味を持っている活動ごとにグループに分かれ，活動について理解している情報と今後調べる必要がある事項，抱えている悩みや不安，期待，活動を通して身につけたい MCC 10 をグループでまとめ，発表した。グループワークのねらいは，1）情報を整理することで活動への理解を深めること，2）同じ不安や質問を持っている仲間の存在に気付き，学生間で相互支援を行うこと，3）自身の言葉で活動に対する思いを伝えあうことで活動のモチベーションをあげることであった。

グループワークを通して活動に関する情報や質問をある程度整理した上で，活動計画書を提出させた。留学の費用負担等も含めて，活動への参加について必要に応じ家族と相談できるよう，提出期限は冬休み明けの 2021 年 1 月とした。活動計画策定は，1 月時点での学生の活動に対する希望動向を知り，2 年次の履修人数予測やプログラム運営に活かすことが主目的であったが，面談で個別に与えた検討事項について自分なりに考えた結論を計画書に反映させる点も重視した。

活動計画書は 88 名のうち 87 名が提出した。7 月アンケート時よりも多い 22 名の学生がコロナの影響や先行き不透明な状況に対する不安を書き込んでおり，コロナが長期化の様相を呈してきたことで，「いつ留学に行けるのか」ではなく「本当に在学中に留学に行けるのか」といった不安を感じているように見受けられた。また，ホテルやテーマパーク等での企業インターンシップに触れ，「コロナの影響を受け，例年通りの活動はできないのか」と記載している学生もいた。

留学について，GCP 留学に加えて交換留学や認定留学の希望に関しても調査したところ，韓国への交換留学や認定留学を希望している学生は 31 名にのぼったが，同国への GCP 留学に限定すると 9 名であった。英語圏への認定留学[5] を希望している学生は 20 名であったが，GCP 留学に限定すると 10 名であった。7 月のアンケート時から GCP 留学希望者が大幅に減少した理由は，ボランティアやインターンシップを伴う留学であるという GCP 留学の本来の概念を学生が理解したこと，また成績や語学等の選考条件を改めて認識したことの表れと考えられる。海外短期研修の参加希望者は 42 名で，7 月のアンケート時から若干減少した。オンライン留学プログラムの参加希望者は 4 名にとどまった。面談でヒアリングしたところ，オンラインという留学形態に魅力を感じていない学生が多数いたほか，一定の費用負担があることも不参加の理由として挙げられた。国内活動では，企業インターンシップに対して 28 名，新しい活動として挙げられた国際交流プログラムに対して 16 名，ESD スタディツアーに対して 14 名，NGO/NPO インターンシップに対して 13 名の参加希望があった。国内活動への希望者総数

5　英語圏に関しては，協定を締結している協定校がないため，交換留学はなく認定留学のみとなる。

は，50 名から 77 名に増加した。国内活動希望者が大幅に増加したとはいえ，海外活動のみを希望している学生数は 25 名にのぼった。

2020 年度に続いて 2021 年度前期の留学派遣も中止が決定していたため，1 月の調査結果をもとに各活動の参加人数をシミュレーションした上で，活動計画書で海外活動のみを希望している学生に対し，今後どのように履修指導を行っていくかを検討した。

2.4　GCP 活動科目履修（3-4 月）

2021 年 3 月，GCP オリエンテーションを実施した。オンライン留学プログラムを除く海外活動の見通しが立たない中，2 年次にいずれかの国内活動科目を履修するよう呼び掛けるため，より具体的な活動内容について説明を行った。複数回の調査結果に基づき多数の履修者が想定される科目については，定員を設けた上で選考のための課題を課した。オリエンテーションの後には，オンラインによる GCP 履修相談会を開催した。また，「GC 入門」のアンケートや面談，活動計画書で挙げられた質問を Q&A 集としてまとめ，配布した。

2020 年度に実施した調査から各活動のおおよその履修人数を予測したものの，実際の履修動向は予測と大きく異なるものとなった。具体的には，グローバル企業でのインターンシップについて，1 月の調査では 28 名が希望していたが履修希望者は 10 名程度にとどまった。一方で，1 月の調査では希望者が 13 名であった NGO/NPO インターンシップは，履修登録開始直後に希望者が 20 名を超え，これ以上履修者が増えるとインターンシップ先を十分に確保することができなくなるというプログラム運営上の懸念が出てきた。

予測と実際のズレの要因は複数考えられるが，1）もっとも希望者が多いと推測されたグローバル企業でのインターンシップに課題を課し，選抜制にしたこと，2）コロナの影響で対面での企業インターンシップが中止となり，企業訪問や PBL 型演習に変更となった一方で，NGO/NPO インターンシップは予定どおり対面実施の可能性が高かったこと，3）昨年度も実施されていた NGO/NPO インターンシップは，具体的な派遣先やインターンシップ内容をイメージをしやすかったことなどの理由が挙げられる。

活動の派遣先確保にかかるプログラム運営上の懸念があったことから，急遽補完オリエンテーションを実施し，学生に誤解を与えている可能性がある点について詳細を補足した上で，企業インターンシップ希望者にのみ課していた提出課題を NGO/NPO インターンシップ，ESD スタディツアー，国際交流プログラムの希望者にも課した。いずれにおいても選抜基準は設けず，学生の人数の偏りが生じた場合には履修指導で対応することとした。

3．GCP 活動実施状況

3.1　GCP 履修科目確定（4 月）

4 月中旬に履修者が確定した。履修登録開始直後は科目登録に偏りが見られたが，最終的には運営上支障のない履修者数となり，国際交流プログラムおよび ESD スタディツアー履修者が 34 名[6]，企業インターンシップ履修者が 17 名，NGO/NPO インターンシップ履修者が 15 名，ソーシャルビジネスの演習履修者が 23 名[7] であった。1 月調査で海外活動のみを希望していた 25 名のうち 23 名がいずれかの国内科目を履修する結果となった。2020 年度春のオンライン留学プログラムに参加し，卒業要件である GCP の活動科目をすでに 2 単位修得済みの学生が 3 名[8] いた。

国際交流プログラムと ESD スタディツアーは，「GCP フィールド実践演習」という科目下で実施されるものであるが，同科目の活動として，新たに震災学習プログラムが追加された。「GCP フィールド実践演習」履修者は，3 つの活動の中から希望する活動を選択することとなり，34 名のうち 4 名が 2 つの活動を選択した。また，同 4 名以外で 6 名が 2 科目，3 名が 3 科目を履修登録した。

6　国際交流プログラムと ESD スタディツアーは「GCP フィールド実践演習」という同一科目下で実施されるため，履修登録時点では両活動の希望者数を合算する形での履修者数となった。のちに，34 名中 20 名が国際交流プログラム希望者，14 名が ESD スタディツアー希望者と判明した。

7　4 月時点の履修者は 23 名であったが，実際の科目が開講される後期開始時の最終履修者は 26 名であった。同科目には多文化コミュニケーション学科 2 年生以外の履修者もいるが，記載人数は本学科 2 年生のみのものである。

8　3 名に加えて，2020 年度春のオンライン留学プログラム参加により，1 単位を修得済みの学生が 1 名いた。

複数の科目もしくは活動を選択した理由として，グローバル・キャリアプログラム[9] の修了要件として複数の GCP の活動科目修得が求められていることが考えられる。これは，国際学部新設時に GCP とあわせて創設されたプログラムで，GCP で育成する行動力を将来のキャリアで発揮できるレベルまで向上させる任意参加のものである。修了要件として，GCP の活動科目を含む指定科目を 15～19 単位修得する必要があることから，2 科目以上を履修することとした学生がいると考えられる。ただし，プログラム登録者と複数科目選択者を照らし合わせたところ，プログラム修了のために複数科目を履修している学生はむしろ少数であった。学生にヒアリングしたところによると，純粋に活動内容に興味を持ったという理由や，留学に行けないためオンライン留学プログラムと国内活動の両方に挑戦したいという理由等が挙げられた。

表 2　GCP 活動希望者推移[10]（2021 年 10 月時点）

活動				7 月調査	1 月調査	最終履修人数
海外	長期	韓国		33	31	0
		中国／台湾		8	4	
		英語圏		66	20[11]	
			アメリカ	19	1	
			カナダ	26	7	
			オーストラリア	21	2	
			ニュージーランド	－	2	
			イギリス	－	0	
			アイルランド	－	0	
	短期	短期海外研修（大学全体）		47	44	0
			英語圏	－	12	
			フィリピン	－	7	
			韓国	－	20	
			中国	－	4	
			インドネシア	－	1	
		短期海外研修（学科独自）		25	9	
			台湾	15	5	
			フィリピン	10	4	
		オンライン留学		－	1	8
			カナダ	－	1	
			インドネシア	－	0	
		CIEE		11	1	0
国内	実践	GCP フィールド実践演習		5	30	34
			国際交流プログラム	－	16	20
			ESD スタディツアー	5	14	14
			震災学習プログラム	－	－	4
		グローバルキャリア演習		25	28	17
		NGO/NPO インターンシップ演習		20	13	15
		ICCO		－	2	0
	講義	ソーシャルビジネス演習		－	4	26

9　グローバル・キャリアプログラムでは，目指す進路に応じて，1）多文化行政ワーカーコース，2）国際協力（社会貢献）コース，3）グローバルビジネスコースの 3 つのコースを提供している。

10　7 月の調査は選択肢から希望する活動を選ぶ形式のアンケートであったが，1 月は GCP 活動一覧の資料を配布した上で，希望する活動を学生自身が記入する形式とした。また，7 月調査時は長期留学の選択肢を GCP 留学のみとしたが，1 月は交換留学や認定留学の希望も記入できるよう変更した。

11　英語圏の複数の国を留学先として記載している場合は，英語圏の人数に合算した。

3.2　GCP 活動実施（4 月-10 月）

履修者が確定した後，順次国内活動が開始されたが，2021 年 4 月 21 日から 5 月 31 日まで 3 回目の緊急事態宣言が発令されたため，学科で策定したガイドラインに則りその間の対面活動は延期もしくは中止となった。ただし，活動は開始しておらず，目標策定やグループワークを実施している時期であったため，特段の影響は受けなかった。8 月 2 日に大阪府，8 月 20 日に兵庫県に 4 回目の緊急事態宣言が発令され，対面による活動は緊急事態宣言解除まで延期もしくは中止となった。度重なる緊急事態宣言により活動日が延期もしくは変更となった派遣先はあるものの，活動開始前から緊急事態宣言発令時の対応を派遣先の団体や学生と共有済みであったため，混乱は最小限に抑えられた。

先行きが不透明な中，比較的混乱なく活動が進んでいる理由として，プログラムの運営体制が挙げられる。GCP 統括教員と GCP コーディネーターは 2020 年 4 月から定期的に GCP に関する打合せの場を持ち，活動形態や活動内容の変更についてその都度議論を行い，必要に応じ学科教員とプログラム運営にかかる課題や懸念点を共有してきた。また，2021 年 4 月にキャリアを担当する教員が着任した後は，同教員も含めて 3 名で毎週 GCP およびグローバル・キャリアプログラムに関する打合せを行い，活動を通じて得られた学びをいかにキャリア形成に繋げていくかについて，包括的な議論を進める体制を取っている。

写真 2　稲刈りボランティア（ESD スタディツアー）

写真 3　オンライン留学生交流（国際交流プログラム）

3.3　コロナ禍で変更された活動

2020 年 10 月時点で予定していた活動のうち，コロナの影響で変更になった活動は以下である。

- 2020 年度，2021 年度の交換留学，認定留学，GCP 留学は派遣中止。
- 2020 年度，2021 年度の大学および学科の海外短期研修も派遣中止。
- オンライン留学プログラムを新設。
- CIEE が海外ボランティアプログラム分野から撤退のため，同プログラム中止。
- 公的機関の学外プログラムへの参加は延期。
- ESD スタディツアー，NGO/NPO インターンシップは一部オンライン実施。
- 国際交流プログラムはすべてオンライン実施。
- 企業インターンシップの代わりに企業訪問や PBL 型演習を実施。
- 震災学習プログラムを新設。
- ソーシャルビジネス演習は一部オンライン実施。
- 2020 年度，2021 年度の ICCO 短期集中セミナーは中止。

お　わ　り　に

本稿では，2020 年 4 月から開始した GCP 活動について，その取り組み状況を報告した。コロナ禍において，当初想定していたプログラムを大幅に変更せざるを得なかったが，試行錯誤をしながら状況に応じてプログラム

を再構築し，実施が進んでいる。一方で，1 年半の実施を経て，課題も見えてきた。

第 1 に，国内活動への興味関心の喚起が挙げられる。1 期生はオンライン留学プログラム以外の海外活動の選択肢がなかったことから，結果的に 88 名中 85 名が国内活動を行うこととなったが，今後留学が再開された後，海外活動とあわせて国内活動にも目を向けさせる工夫が必要である。

第 2 に，活動の振り返りが挙げられる。GCP の活動は開始後数ヶ月が経過したにすぎず，現時点では PDCA サイクルの Plan, Do の局面に差し掛かったばかりである。GCP の重要な局面である Check, Act において，自身の体験を捉え直し，自らの言葉で体験を整理した上でどのように次の Plan に繋げていくかについて，今後その手法や進め方をさらに議論していく必要がある。

第 3 に，GCP 活動と学科専門科目の連携が挙げられる。GCP は 4 年間のカリキュラム全体を指す包括的なプログラムであり，本稿で報告した GCP 活動の取り組みはあくまでもその一部に過ぎない。GCP 活動での学びを GCP のコア科目であるゼミやその他の専門科目に繋げ，PDCA サイクルを繰り返しつつ有機的に連携し，さらには学生の進路やキャリア構築に繋げていくかを継続検討していく必要がある。

本報告では，コロナの蔓延とともに開始となった GCP の 1 年半の歩みとその課題について一定の材料を提供した。しかしながら，活動自体は 1 期生の取り組みが開始したところであり，所期の活動目標は達成できたか，活動を通してどのような学びを得たか，当初海外活動を希望していた学生にとって国内活動の満足度はどうか等の問いに対するヒアリングや分析はできていない。今後，活動終了後の個別面談やグループでの振り返り，GCP 成果報告会が予定されており，データを蓄積すべきである。さらに，1 期生と 2 期生の傾向分析比較にも取り組んでいきたい。

謝辞

GCP の運営，実施にあたっては，統括する高橋真央准教授の存在なくして実現を得なかった。